

演題番号：C7

嚢胞を主病変とした原発性上皮小体機能亢進症の猫の1例

○市田千尋¹⁾，鍋谷知代¹⁾，金城綾二¹⁾，富張瑞樹^{1) 3)}，加藤和也⁴⁾，鳩谷晋吾^{1) 2)}

¹⁾ 大阪公大 獣医臨床センター，²⁾ 大阪公大 細胞病態学研究グループ，³⁾ 大阪公大 特殊診断治療学教室，⁴⁾ 神原動物病院・兵庫県

1. はじめに：原発性上皮小体機能亢進症 (PHPT) は、上皮小体の機能性腫瘍または過形成により上皮小体ホルモン (PTH) を過剰産生する結果、高カルシウム血症が起こる疾患である。画像検査所見では、上皮小体の腫大や腫瘤形成が特徴で、腫瘤近傍に嚢胞を形成する例もまれに見られる。今回、腫瘤を形成せず、嚢胞が主病変であったPHPTの症例を経験したため、その概要について考察した。

2. 材料および方法：雑種猫、去勢雄、15歳8か月。多飲多尿を主訴に紹介元病院を受診した。血液検査で血清カルシウムの高値が確認された。高カルシウム血症の原因精査のため、当センターを紹介受診した。

3. 結果：第1病日、血液検査でBUN、Creの上昇は見られず、高カルシウム血症の原因として、腎性上皮小体機能低下症を除外した。X線検査や腹部超音波検査で腫瘤や肉芽腫を疑うような所見はなく、腫瘍随伴症候群、肉芽腫性疾患を除外した。また、紹介元病院の血液検査でintact-PTHの高値が見られたため、特発性高カルシウム血症も除外した。左頸部に波動感のある結節が触知され、超音波検査で直径10 mmの低エコー源性結節、CT検査では左甲状腺左側に嚢胞が確認

された。臓器位置関係から嚢胞が上皮小体と関連していると考え、第15病日に嚢胞を摘出した。病理組織学的検査では、嚢胞壁を構成する細胞が腫瘍性に増殖していた。これらの細胞は、抗PTH抗体による免疫染色で陽性を示したことから、上皮小体腺腫と診断された。第22病日に、イオン化カルシウム、intact-PTHは基準値内まで低下した。

4. 考察および結語：本症例は、触診や超音波検査で頸部に結節が確認されたが、CT検査では左甲状腺内に嚢胞のみが確認された。猫のPHPTは、上皮小体の腫大や腫瘤形成が特徴とされ、嚢胞が主病変である症例はこれまで報告がない。そのため、嚢胞がPHPTの原因であると特定できなかった。しかし、他の高カルシウム血症の原因疾患を除外し、臓器位置関係ならびにintact-PTHが高値であったことから、嚢胞が上皮小体に関連していると考え嚢胞を摘出した。病理組織学的検査で上皮小体腺腫と診断が得られ、嚢胞がPHPTの原因であることが明らかになった。猫のPHPTでは、上皮小体の嚢胞が主病変となる可能性もあるため、診断、治療のために嚢胞の摘出を検討する必要がある。